

長谷川茂常作

ジャンヌダルクは

ムゲンファ もと

無窮花の下に（都発表用）

【登場人物】

柳寛順（15歳）16歳）：
柳寛順の母：
柳寛順の友人1：
物売りの男：
老婆：
立ち話をしている女2：
日本人（男）：
刑事1：

優一（日本人少年、16歳）：
朝鮮人の母：福原弘菜
柳寛順の友人2：
物売りの女：
買い物客1：
食べ物をあさる子ども：
日本人（女）1：
刑事2：

柳寛順の父：
朝鮮人の少女（8歳位）：
ピラ配りの女：
農民：
立ち話をしている女1：
日本人（女）2：

物売りの男	物売りの女	ピラ配りの女	物売りの男	物売りの女
何だ、何だ。ウーン。	みんな争ってピラを受け取る。	うれしいことが書いてあります。	さあ、安いよ、安いよ。一つ買っておくれよ。安くて丈夫だよ。	おいしいまんじゅうだよ。まんじゅう。
			セリフの途中で明転	
			暗転開	
			「地図の上、朝鮮国にくるぐると墨を塗りつつ秋風を聞く 1910年、明治43年。朝鮮併合の年9月 石川啄木」 往来（物売りやそのお客、乞食、農民など）	
			第一場	
			全開	
			照明・音響	
			スライド 朗読 陰マイク 位置確認	

買い物客
物売りの男
立ち話をしている女¹
立ち話をしている女²
ピラ配りの女
買い物客
農民
物売りの男
ピラ配りの女
農民

あんだ、字読めんのかい？ そいつは逆さまだよ。
バカにすんない。エーと……。オーイ、誰か読んでくれー。

そんなこと言ったって。こちら辺りにや字の読める者なんて……。
その間に食べ物をあさる子どもは売っている物を盗んで食べる。
えーい、面倒だね。あんだ、これ読んどくれ。

じゃー読みましょう。よく聞いて下さいよ。(ピラ配りの女、自分の持っているピラを読み出す。興奮した様子) 独立運動開始さる。2千万民衆の総意に基づき、自由と平等、民族の誇りを取り戻すこの日、志ある者は全て、この運動の隊列に加わるべし。

ざわつく。次々にしゃべり出す。かぶってよい。
極度の興奮状態。

それは本当だか？
嘘じゃねーだろな？
信じらんネー！

(前の台詞とカブル) まあ、まあ、待ってください。先を読みますから。本日、西紀1919年3月1日。パゴダ公園にて遂に独立宣言がなされた。その内容は以下の通りである。
「我らはここに、我が朝鮮国が独立国であること、及び朝鮮人が自由の民であることを宣言する。このことを世界万邦に告げ、人類平等の大義を闡明し、……」

(前の台詞とカブル) ちょっとまった。何を言っているのか難しくて、

物売りの男
ピラ配りの女
農民
買い物客
立ち話をしている女¹
立ち話をしている女²
みんな
物売りの男

あたしにはよくわからねえだよ。

ばかだなー。要するに俺達の国が独立し、独立するんだからイルボンニン、日本人がこの国から出て行く、ということだよ。

ざわつく。(ついに来たんだ。そうだ、そうだ。大丈夫かな。軍隊が出てくるんじゃないか……など)

やっとその日がきたんだ。日本に併合されてから10年。植民地になつてしまったあたしらの国が独立するんだよ。

まあまあ、そんな簡単な話ではないでしょう。日本だってこれからさまざま弾圧をかけて、この運動をつぶしにかかってきます。しかし、それに負けないで独立を勝ち取るんですよ。

口々に「そうだ、そうだ。」「イルボンニンをこの国から追い出せ。」「追い出せ、追い出せ。」

すでに数千の人々が、我が国の旗、テグツキをうち振りながら「トンリツマンセ」「独立萬歳」と叫びつつ行進しているんです。

そうか。これはうかうかしてられないよ。みんな私たちも加わろうじゃないか。

そうだそうだ。虐げられ、搾り取られるだけの惨めな暮らしはもうたくさんだ。

ホントだよ。よその国にあたしらの国を勝手にはさせないよ。

そうだ。そうだ。

命に替えても独立を勝ち取るんだ。どうせこのままじゃのたれ死にと同

子ども
農 民
老婆以外の者
物売りの男
ピラ配りの女
老 婆
優 一
柳寛順
優 一
柳寛順

じなんだ。

おいらもいくよ。アツバとオンマはイルボンサラムの高利貸しに田圃や畑を取られて、乞食になった。そして飢えて死んじまった。おいらに喰わせるために。イルボンサラムに殺されたようなもんだ。

人ごとじゃねえ。みんなやろつよ。やってやる。

(荷物を袖に滑らせてそでに入れ、飛びだしていく。)

(口々に)行こう。おー。

(売り物を片づけてから移動。)おーい。

(ピラ配りはピラを振りながら)みんなこれを読んで下さい。

下手に入る。その際、ピラを高くまく。

長生きはするもんじゃ。生きている間にこの国の独立を目にすることが出来る。こんなうれしいことはない。(退場)

老婆が完全にはけたら優一、上手登場。柳寛順、下手登場。

あの日からですね。この国の独立に命を賭けた、15歳のあなたが、疾風のごとく、その短い生涯を駆け抜けていったのは。

そう。民族の誇りも自由も、人としての尊厳までも奪われた私たちはついに立ち上がった。

そして、それは燎原の火の如く、瞬く間に全土に広がっていった。

そうです。だから、学校が休校になると、私は燃える思いを胸に、飛ぶようにして故郷へ帰った。そして、すぐに大人達を説得して行動を起こしたわ。「独立万歳」の声が轟く中、父も母も隊列に加わってくれた。

素早く荷物の片付け。

老婆の位置に注意。

完全にはける迄待つ
必要なし。

照明絞り
下手・上スポット

優 一
日本人(女)1
日本人(女)2
日本人(女)1
日本人(男)1
日本人(女)2
日本人(女)1
日本人(男)1
日本人(女)2
日本人(男)1
柳寛順

でも、日本の警察や軍隊は刀を抜いて、斬りかかり、その後、無差別に発砲してきた。その中で父と母はあいついで殺された。ああー、この運動の中で何と多くの人々が苦しんだことでしょう。数千の命が奪われ、数万の人々が傷つけられ、投獄され、酷たらしい拷問を受けたのです。

そんなあなたとの出会いはその年の旧正月が明けた頃だったでしょうか。

二人がはけたら照明全開。同時に次の台詞。

第一一場

泥棒一、泥棒一。だれか捕まえておくれ。(袖中)

子ども上手より走って登場。中央付近で躓き倒れる。饅頭が転がる。
日本人(男)1が捕まえる。

不逞野郎だ。(突き飛ばす。)

柳寛順とその友人1、2、舞台下より登場。
日本人(女)2と日本人(男)2、遅れて日本人(女)2登場。

まったくだよ。

ホントに何てヤツだ。私ら日本人から商売物を盗むなんて。

このガキヤ。(一発目の平手打ち。)

凶々しいヤツだ。(持っていた棒でバシバシ殴る。)

柳寛順とその友人下手から登場。

あっ。(助けに行こうとするが、友人2人は押しとどめる。)

照明全開

ここから次の台詞ま

友人 1

(押し殺したように) 寛順、だめ。

できるだけ短く

友人 2

(押し殺したように) 今行ったら何をされるか分からないわ。

行こうともかく柳寛順。

そのとき、学校帰りともいうように、上手に登場した優一。

日本人(男)

この野郎、二度とこんな真似させねえぞ。(平手打ち。)

優一、思いあまって、二度目の平手打ちで思わず飛びだしていく。

優一

やめて下さい。相手は子どもです。(子どもをかばう。そのとき、優一の顔面にも当たり、出血する。)

日本人(男)

何だい。この学生さんは。このガキを庇うのかい。

そうだよ。こいつはね、あたしの店から饅頭を盗んだんだよ。とんでもないやつなんだよ。

学生さん。こいつらを甘やかしちゃいけないよ。つけあがるだけだよ。

優一

わ、分かりました。お金は僕が払います。(ポケットから、がま口を出して) これで足りみますか。

どれ、という感じで素早く近づく。

日本人(女) 1

(お金を受け取って) まあ、あんたが払うって言うんなら。(お金をしまいながら) 全く奇特な人だよ。こんなガキのために。

ブツブツ言いながら、上手に引き上げる。

柳寛順、飛びだして、子どもを助け起こし、服に付いた泥をはたいてやる。

二人とも日本人が退出したら即動く。

優一

(まんじゅうを拾って) もうだめになってしまった。どうして盗みなんかしたんだい。お腹が減っていたのかい。

そうだ、(まんじゅうをおいてから、がま口を取り出す。) これで何か買ってお食べ。(子どもの手に握らせる。)

子ども、その金を地面に投げつけて、落ちていた饅頭を拾って一目散に下手に逃げる。驚く優一。見送る二人。

柳寛順

(慌ててお金を拾う柳寛順。) ごめんなさい。(お金を渡しながら) あの子は、日本人から恵んでもらうのがイヤだったのよ。きっと日本人に土地を追い出されて、この町に流れて来たんだわ。あっ。

いいんです。(ちょっと考える間) きっと日本人を恨んでるんだろうな。

あなた達は支配する側。私たちは支配される側。それは仕方のないこと。

でも、何てひどいことを...。 あっ。血が。(ハンカチを取り出して、拭いてやるうとする。)

あっ、大丈夫です。(ハンカチを奪うようにするとき、手が触れ合う。思わず手を引っ込める二人。)

ど、どうもありがとう。助けて下さって。私、柳寛順。さよなら。

あ、僕、佐藤優一。

逃げるように上手に走り出す。後を追う友人。見送る優一。しゃべりながら、柳寛順と友人が戻ってくる。

優一は慌てて下手の袖に隠れる。

友人 1

(袖から始める) 寛順、あんた何を言ってるの。あの学生は日本人よ。憎むべき敵の一人なのよ。

友人 2

「そうよ。それを恋人の出会いみたいに、「私、柳寛順。さよなら。」
「あ、僕、佐藤優一。」なんて。
今、私たちの国は大事なときなのよ。独立の機運が、正に、天に届か
ばかりに盛り上がってきている。私たちもそれに参加するのよ。」

(前の台詞とダブル。) 分かっているわよ、そんなこと。私はただ、子ども
を助けようとしたあの人にお礼が言いたかっただけだわ。

(疑わしげに) ふーん。ホントにそうなの?
あなたは、日本人が憎くないの?

柳寛順

憎いわ。私だって、私だって、人一倍憎んでるわ。

私の父はね、学校に行けない村の子ども達のために、小さな学校を開い
たの。でも、僅かな学費も払えない貧しい家庭が多かったから、すぐに経
営は行き詰まってしまった。父の元に残ったのは借金だけ。日本人から借
りたそのお金は一年もしないうちに十倍にも膨れ上がった。日本人から借
は厳しかった。父は殴られ、脅され、逆さにつるされ、まるで拷問そのも
のだった。

友人 2

そうだったの。植民地にされた国は学ぶことさえ奪われてしまう。学校
で朝鮮人である私たちが学ぶ国語は日本語、朝鮮語ではない。この国の歴
史さえ教えることが許されない。

友人 1

取り上げられたのはそれだけじゃない。あの土地調査で、私の家の土地
はわずか三分の一になってしまった。所有を証明する文書や記録がないと
か、境界線がはっきりしないと何か何とか言って、土地を取り上げられてし
まった。取り上げられた土地は今では移住してきた日本人が耕作している。
とにかく独立しなければ、植民地から抜け出さなければ、こんな理不尽
なことは解決しないんだわ。

柳寛順

そうよ。そうよ。
でも、さっきの人、あの人はいい人よね。日本人でも。

しみじみ思い出す風。

柳寛順

(とまどったように) あ、ウン。そ、そうね。

支配する、支配される、そんなことがなければ、国境を越え、民族の違
いを超えて、出会いがあるかもしれない、そこから友情が、もしかしたら
恋も生まれるかもしれない。私も、そんな時代に生まれたかったわ。

終わりの部分はつづ
やくように。

友人 1

何を夢みたいなこといつてるのよ。そんな甘いこと言ってるときじゃな
いでしょ。ばかばかしい。

友人 2

ばかばかしいことじゃないわよ。ねえ、寛順。

すねた感じで。

友人 2

エッ、そ、そうね。でも、今はそんなこと考えるのはよしましよ。

友人 2

分かっているわよ。私だって。
(ちよつと慥然として) ちよつと言ってみただけでしょ。

はじめの台詞はすね
た感じで。

友人 1

さあ、帰るわよ。(三人退場。)

優一、袖の陰から見送る。手にはハンカチ。

退場し出したら、優
一はすぐに出る。

暗転

照明全開

第二場

港の雰囲気

波止場。下手より旅行支度の優一。

ふと、無窮花のついた帽子を見つめる。それを手に取って辺りを見
回す。

朝鮮人の少女が何かを探しながら、上手より登場。
これを探しているの。(帽子を揚げる。)

あっ、あった。コマスミダ、ありがとう。

少女

優一

優 一
少 女
優 一
母
優 一
母
少 女
優 一
母
優 一
少 女
優 一
少 女
優 一

どういたしまして。(帽子をかぶせてあげる。)
この花、綺麗だね。ムゲンファって言うんだらう。

そうだよ。アツパが言ってた。

この花は、朝に咲いて、夕方には散ってしまう。でも、次から次へと咲き続ける、生命力の強い木なんだって。だから、この国の人間はこの花に元気づけられて生きているんだ、そう言っている。

そうなんだ。ムゲンファはこの国の花なんだね。

そうよ。この国の花。私たち、民族の花。

(照れくさそうに)花言葉は信念、尊敬、そして、愛、なんだって。

(つぶやくように)花言葉は信念、尊敬、そして、愛、か。

ネエー。帽子は見つかったのかい。

見つかったよー。

(中央に移動しながら)それはよかった。

うん。このイェボンニンのお兄ちゃんが拾ってくれたの。

(慌てたように)これ、そんな馴れ馴れしい口きいて。申し訳ありません。

いやー、いいんですよ。

いいえ、全くお恥ずかしい。ちゃんとお礼を申し上げたの。

ウン。ちゃんとしたよ。

優 一
母
優 一
母
優 一
母
優 一
母
優 一
母
優 一
母
優 一
母
優 一

大丈夫。きちんとやれたよね。

そうですか。どうもありがとうございます。おやおや、坊ちゃんは帰国ですか。

坊ちゃんはやめて下さい。

そうです。内地の中学校に変わるんです。でも、本当はこの国にいるのもうイヤになってしまったんです。あ、ごめんなさい。

滅相ありません。そんなことを言っではいけませんよ。

だって、この国にいと日本人の嫌なことばかりが目につくんですよ。それから逃げ出したい、それが本当のところかな。

あなたも、日本へ行くんですか。

はい。こつちではもう食えなくなってしまうたもんですから。

そうですね。日本人がひとり来ると三十人の朝鮮人が国を出る、そんな噂も聞きました。あなたもそうなんですか。

いえいえ、土地を追われた者が、故郷を捨てて仕方なく、北の者は満州へ、南の者は日本へ流れていく。

でも、私の場合はちよつと違うんですよ。

あの三月の事件のあおりで、私も家族がお世話になっていた日本人のお屋敷が、燃えてしまったんです。

それはお気の毒に。

まあ、それを潮に、ご主人が商売を辞めて日本に帰ってしまわれたんです。いい人だったんですが……。私らにも分け隔てなく接して下さい。お子が無かつたせいとか、この子もずいぶんかわいがって頂きました。

間髪を入れずに。
台詞は袖から始める。

柳寛順

やめてー。(もがくが刑事2に押さえられる。)

刑事2

さあ、行くんだ。(追い立てる。)

刑事1

何を考えてるんだ、この学生は。フン。

優一

優一を見つめながら柳寛順は退場。

優一はただ見詰めるだけ。

見送りの人々はいぶかしげに囁きあう。そのうちの一人が優一を助け起こし、ズボンの泥をはたく。

優一はなされるまま。呆然としている。

柳寛順、君はこれから……。

照明暗くなる。優一にライト残り。聞くに堪えない様子で退場。一度止まる。はけたらパネル出し。上手、中央は照明消し。

全体絞り
優一サスライト
上手、中央は照明消し

刑事1

(優一にサスが当たったら、下手陰で) また、お前は「独立万歳」を叫んでいたな。監獄をなめんじゃねえ、この小娘が。(たたく音と苦痛の声。)

柳寛順

(息も絶え絶えに) 朝鮮人だからよ。この国の人間だからよ。

刑事1

この国?何を言ってるやがる。お前の生まれ育った昔の国はもう消えちまったんだよ。今、ここはな、日本、日本なんだよ。

柳寛順

(前のセリフとかぶる) 私たちの国はまだ消えてはいない。あなた達日本人が勝手に居座っているだけよ。

刑事1

何を生意気なことを。(たたく音と苦痛の声。)

今度またやったら、ここを生きて出られるとは思うなよ。憶えとけ。連れていけ。

刑事2

はい。さあ、立て。

一瞬の暗転

明転 下手、牢獄だけ薄明。

バックはコンクリートの壁。たかいたところに格子窓。それを通して青空が見える。倒れてこんでいる柳寛順。

第五場

柳寛順

(ぐったりしている。半身を起こして。) 今度またやったら、ここを生きて出られるとは思うなよ、か。

柳寛順

ホントだわ。私はもう、ここを生きて出られないのかもしれない。(間) あ、鳥だわ。(窓に取りすがろうとする。出来ずに頼れるように倒れ込む。)

柳寛順

どこまでも青い空か。もう私にはそんな青空を見ることが出来ないのかもしれない。

柳寛順

あつ、歌が聞こえる。アリラン、そう、別れの歌、アリランだわ。そうなのね、私もそう遠くない日に天国へと旅だっていくのね。

柳寛順

でも、その前に一目、一目だけでもいい。独立したこの国を見てみたい。そう、独立すれば、日本人だから、朝鮮人だから、そんなことを考えることもない、夢のような日もいつかはくるだろうに。

柳寛順

あつ、そうしたらもう一度、あの優……ううん……

柳寛順

ああーそれにしても疲れたわ。(ゆっくり倒れる。)

柳寛順の父と母登場。ライト。

寛順、寛順。

大丈夫かい?

柳寛順の母

あ、アボジ、オモ二。

柳寛順

あ、アボジ、オモ二。

下手薄明

鳥のさえずり
ゆっくりFO

中央全開

柳寛順の父

柳寛順

柳寛順の父

柳寛順の母

柳寛順

柳寛順の父

柳寛順の母

柳寛順

柳寛順の父

柳寛順

柳寛順の母

柳寛順の父

柳寛順

柳寛順の母

柳寛順の父

気がついたかい。

うん。でも、もう私ダメみたい。

そうか。ずいぶん頑張ってきたからなあ。

そうよ。あなたのことは天国からずっと見守っていたのよ。身を切られる想いで二人して見ていたの。(涙ぐむ)辛かったでしょう。それを見る私たちもほんとに辛かった。

ありがとう。アボジやオモ二、私、一生懸命戦ってきた。

分かっているよ。

ねえ、なぜ日本は私たちにこんな苦しみを与えるんでしょう。私は本当に彼らが憎い。ねえ、アボジ、オモ二もそうでしょ。

でも、みんながみんなそうではないよ。彼らの中にもいい人はたくさんいるさ。

アボジは高利貸しにあんなひどい目にあっても。彼らに殺されてもそう思うの。オモ二もそう思うの。

ええ、私も今はそう思っている。

いいえ、時の流れがそうさせた、そういうことでは決してないの。私の胸の中にはあなたと同じように、日本人への恨み、憎しみが今も消えることなく残っている。でも、この世界に来て、静かに過去を振り返ったとき、私はね、寛順。私はもつともつと人間を信じたくなくなってきたの。

寛順。お前達は私たちの思いを立派に受け継いで戦ってくれている。お前達のその思いは、いつかきつと彼らに通じる日が来るよ。自分たちの間違いにきつと気付く日がくる。だから、憎しみだけで行動してはいけな

い。憎しみは憎しみを呼ぶだけなんだよ。

私には信じられない。今の私には日本人はみんな敵……。

ううん、一人だけいたわ。あの人は別、別だった。

どんな人なの？

私と同年位の男の子。その人は、盗みを働いて日本人に痛めつけられていた子どもを身を挺して助けてくれたの。それに、私がソウルへ護送されたとき、傷ついた私にハンカチをそつと差し出してくれた。そのとき、彼は刑事に突き飛ばされ、足蹴にされた。でも、私をじつと見つめて見送ってくれた。そのときの彼の目は優しさに満ちあふれていた、そして、とても悲しそうだった。

おやおや、ヤボ。この子はどうやら。

そうですね。

え、何？へ、変なこと言わないで。だって二度しか会ったことないのよ。

あつた回数なんて問題じゃないわ。人を好きになる。私はね、こんな時代なのに、あなたが人として、そんな感情を持つことが出来た、それがうれしいの。だって、あなたはまだ一六歳なんだもの。

人が憎しみだけで生きていく、それは最も不幸で悲しいことなんだ。お前の心の底には、人を憎むことより、人を愛そうとする美しい気持ち

しっかり生きていくんだよ。お前はその少年にそんな希望を見たのさ。

なんだか私にはよく分からない。ただ、あの人を思い出すと、なんか自分がとても素直で優しい人間になったような気がしたわ。でも……。

柳寛順の父

でも、なんだい？

柳寛順

ウウン、なんでもない。(間)
アボジ、私は精一杯自分の義務を果たしてきたのかしら。まだ、やるべき事があるのではないかしら。

柳寛順の父

もうそんなことを考えるのはおやめ。私達はお前を誇りに思っているんだから。

お前は、虐げられ、民族としての、いや、人としての誇りまでもが踏み
にじられてきた人々に、独立という希望を与えてくれたんだ。

柳寛順の母

こんな時代に生まれなければ、一六歳のあなたは人並みの幸せが待って
いたんだらうに。それを思うと・・・。(涙ぐむ。)

柳寛順

オモニ、そんなことないわ。今のアボジの言葉で、私は自分の義務を少
しは果たせたかもしれない、そんな気がして来たんだから。他のことはも
ういいの。(間) 私、なんだか疲れたわ。

柳寛順の父

そうかい。もういいよ。お前は十分やつてくれた。

私たちのところにお出で。安心して私たちのところにお出で。もうゆっ
くり休んでいいんだよ。

柳寛順

うん。(ゆっくり倒れ込む。)

暗転 (トライアングルの音)

明転

第十八場

波止場。

そうですね。坊ちゃんがあむすめの娘と顔見知りだったとは。確かにあの娘は

中央消し
下手ゆっくりFO
暗転 効果音
明転(全開)
下手サススポット
中央サススポット

優一

私たちに勇気と希望を与えてくれました。でも、なんだかかわいそうで。
(ハナを嚙る。)

母

そんな状態に追い込んだのは僕たちなんです。何て言ったらいいのか。
とんでもありません。坊ちゃんのせいなんかじゃありません。あまり気
になさらないで下さい。

優一

坊ちゃんはいいいひとですねえ。
そんな。何にも出来ないただのガキです。

母

そんなことはありません。
ねえ、オンマ。もうアツパのところに行こうよ。

母

分かった、分かったよ。もう飽きてきたんかい。それじゃ、坊ちゃん。
これで失礼します。私らは今日の便で出発しますんで。

優一

そうですね。僕は、次の便なんです。それでは。

父と少女はお辞儀をする。連れだつて上手に移動。
父、ふと立ち止まり、振り返る。

母

坊ちゃん、どうぞ一生懸命勉強して下さいな。学問を積んで偉い人にな
って下さい。それでもつて、私らと坊ちゃん達が腹の底から笑い合つて会
える、そんな日がくるには、どうすればいいのかを、みんなに教えてやっ
て下さいな。それは、私らには出来ないことなんですから。

母優一

そんなこと、僕には無理ですよ。
いいや。坊ちゃんなら出来ますよ。だつて、坊ちゃんの胸ん中
には、あの娘が、柳寛順が蒔いた種がしつかり埋まつてるんですから。

母と少女は行きかける。

ねえ、あのイルボンニンのお兄ちゃん、泣いているよ。

いいんだよ。人は泣きたいときには泣いていいんだよ。それにしても、あの方の涙はなんて綺麗なんだろう。坊ちゃん。今日だけは、あの無窮花のような娘のために、泣いてやってください。あの娘もきつと喜んでくれるに違いありません。

アンニョンイカセヨ。(元氣よく手を振る。)

アンニョンイカセヨ。(弱々しく手を振る。)

(間) 優一は取り出したハンカチを握りしめる。一人泣く。
柳寛順登場。無窮花をバックにが夢見るような眼差しで空を見上げてている。背景は青空。

アリラン アリラン・・・

汽笛がなる。アリランの歌声続く。

・ 幕 ・

背景青空に変化
パネル開き出す
中央サス残し
下手サス残し
その他舞台F O
(青空をきちんと
見せる)
汽笛

少女 母
少女 優一
柳寛順